

Ⅱ 管内小中学校の児童生徒状況

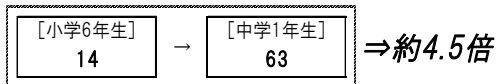
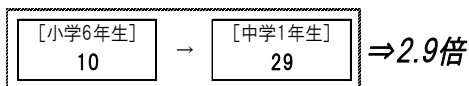
1 不登校児童生徒数の推移 (H. 24～)

H.24			H.25			H.26			H.27				
	12月	参考 3月末	入学		12月	参考 3月末	入学		12月	参考 3月末	入学		12月
小1	2	<4>	→ + 1	小1	1	<1>	→ + 3	小1	5	<7>	→ + 4	小1	5
小2	2	<3>	→ + 2	小2	3	<4>	→ + 2	小2	4	<8>	→ - 2	小2	9
小3	6	<7>	→ + 2	小3	4	<4>	→ + 2	小3	5	<7>	→ + 3	小3	2
小4	5	<8>	→ + 2	小4	8	<12>	→ + 3	小4	6	<9>	→ + 5	小4	8
小5	9	<11>	→ ± 0	小5	7	<15>	→ + 8	小5	11	<14>	→ - 2	小5	11
小6	8	<10>	→ + 11	小6	9	<14>	→ + 34	小6	15	<28>	→ + 18	中1	33
中1	24	<37>	→ + 22	中1	19	<29>	→ + 35	中1	43	<63>	→ + 19	中2	62
中2	68	<78>	→ - 2	中2	46	<56>	→ + 14	中2	54	<62>	→ - 6	中3	48
中3	47	<52>	→ 卒業	中3	66	<71>	→ 卒業	中3	60	<70>	→ 卒業		

H.24 不登校

H.25 不登校

H.26 不登校



大河原管内では、中学校1年生において、小学校6年生に比べて不登校が大きく増える現象、いわゆる「中1ギャップ」問題が続いている。例として、今年度中学校に在籍している

生徒について平成24年度からの推移を見ると不登校増加率が大きくなっている。このことから、現状をしっかりと受け止め、中学校における中1ギャップ対策はもちろん小学校段階からの不登校対策が急務である。管内の学校の中には昨年度不登校ゼロという学校(小学校21校・中学校4校)もあるが、不登校問題はいじめ問題同様いつこの学校で起こってもおかしくないことから、小学校からの中1ギャップ未然防止の取組が望まれる。

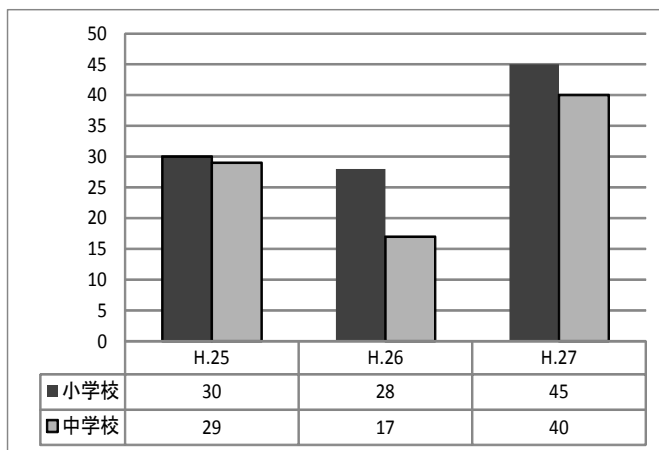
2 いじめ認知件数の推移 (H. 24～)

校種	H. 25	H. 26	H. 27
小学校	30 (34)	28 (37)	45
中学校	29 (36)	17 (19)	40

※数値は、12月までの累計。()内は最終的な数値。

今年度、いじめの認知件数の増加がみられる。各校における校内研修や学校訪問の際のいじめ等に係る話し合いを通し教師側の意識の高まりの現れと思われる。

報告されたいじめはいずれも解消、あるいは解消に向かっており、重大事案に至るケースは見られない。



3 問題行動数の推移 (H. 25～)

項 目		H. 25	H. 26	H. 27
暴力行為	対教師	2 (2)	1 (1)	1
	生徒間	5 (6)	2 (6)	3
	学校間	1 (1)	0 (0)	0
	器物損壊	3 (3)	0 (0)	2
	総 数	11 (12)	3 (7)	6
小学校	授業妨害	2 (2)	0 (0)	1
	授業抜け出し	2 (2)	0 (0)	2
	盗難・金銭強要(被害)	2 (2)	1 (1)	0
	窃盗・万引き	19 (22)	14 (15)	10
	金銭強要(加害)	2 (2)	0 (1)	0
	飲酒・喫煙	4 (4)	0 (0)	1
	薬物乱用	0 (0)	0 (0)	0
	家出・無断外泊	0 (0)	0 (0)	2
	性非行(不純異性交遊等)	0 (0)	0 (0)	0
	交通事故	5 (5)	2 (2)	2
	不審者による連れ去り, 声がけ等	1 (1)	0 (0)	2

※数値は、12月までの累計。()内は最終的な数値。

【小学校】

大きな変化は見られないが、「窃盗・万引き」の件数は減少傾向である。

項 目		H. 25	H. 26	H. 27
暴力行為	対教師	9 (10)	2 (3)	1
	生徒間	23 (25)	17 (23)	26
	学校間	6 (6)	0 (0)	1
	器物損壊	13 (14)	14 (21)	9
	総 数	51 (55)	33 (47)	34
中学校	授業妨害	5 (5)	1 (3)	2
	授業抜け出し	14 (16)	21 (24)	12
	盗難・金銭強要(被害)	5 (5)	8 (10)	1
	窃盗・万引き	20 (21)	12 (15)	7
	金銭強要(加害)	3 (4)	3 (3)	1
	飲酒・喫煙	22 (33)	36 (45)	7
	薬物乱用	0 (0)	0 (0)	0
	家出・無断外泊	13 (15)	6 (10)	11
	性非行(不純異性交遊等)	0 (0)	0 (1)	2
	交通事故	7 (9)	3 (6)	6
	不審者による連れ去り, 声がけ等	2 (2)	1 (1)	0

※数値は、12月までの累計。()内は最終的な数値。

【中学校】

全体としては減少傾向である。特に「飲酒・喫煙」の減少が著しい。一方で、SNS等により交友関係が広がったことが原因で「家出・無断外泊」の報告が多く見られた。

Ⅲ 集団をつくる

1 集合と集団

(1) 人間関係づくりが大切

いじめ・不登校問題の未然防止には、「互いに尊重し合う」人間関係をつくるのが大切です。互いに違いを認めた上で、相手を受け入れ、理解し、自分と違った考えをもっている相手でも、受け入れられるように育てたいものです。

「自己肯定感」を育てる際も、「自分は学級の仲間に受け入れられている」という「受容感」

と「自分はここに居てよい」という「集団への所属感」を味わわせることが必要です。子どもの活動を教師や友人が認めることを通して「自分は学級のために役立っている」という「自己有用感」と「自分もやればできる」という「自己効力感」を感じさせることができます。このように「受け入れられる、認められる」ことを繰り返し経験させ、これらの感情を味わわせながら「自己肯定感」を育てます。その際、教師の姿勢として「あなたのことが大事、あなたのことをしっかり見ている」というメッセージをしっかり送ることが重要で、その姿勢が子どもたちを感化し、好ましい人間関係を学級全体に波及させていくことになります。仲間から認められ、自己肯定感をもった子どもは、仲間を認めることができるようになっていきます。つまり、お互いを認め、尊重し合うという好ましい人間関係により、学級という集団を育て、最終的に「この学級でよかった、この学級が好きだ」という「学級集団としての肯定感」を育てることにつながっていきます。

(2) 学級が集合化？・・・

集合というのはただの人の集まりのことです。集団は、ある程度組織化された集まりというのが社会心理学の定義になります。集団には、まとまり、凝集性が現れます。それから目標とリーダーシップが存在します。リーダーが威張っているのではなくて、目標に向かって全体をまとめるという作業を行っているということです。その姿から、自分たちも頑張ろうとします。お互いに助け合うということや役割の分担、責任感、振る舞い方の規準、規範意識が育まれます。

最近学級が集団ではなく、集合になっていると言われます。それは、親の価値観の変化、社会の変化により以前に比べ、子ども達が集団化しにくくなっているということも考えられます。

集団が集合化すると、共通行動、相互依存的関係、規範は消失していきます。掃除を平気でサボり約束を守らない子が増え始めます。さらに、悪いとすら思えなくなってしまいます。集団づくりでは、「意図的に子ども同士の関係性を作り、その中で関わり合いや認め合い、そして、支え合う関係を経験させること」が大切です。「集合」状態の子どもたちをいかに「集団」に変えていくかが、子どもがかかえる問題を解決していくキーワードだと言えます。



(3) 頑張り方を教える・・・

行動科学マネジメントの世界では、勉強も望ましい行動もできない理由は2つしかないと言われてしています。

行動できない第1の理由は、「やり方自体がわからない」場合です。励まされても叱られても、知らないことはやりようがないからです。

第2の理由は、「やり方はわかっているが継続できない」場合です。「モチベーションを持続できない」と言い換えてもいいでしょう。この2つのパターンをうまく解決することで、改善を図ることができるというのが行動科学マネジメントの考え方です。

大きく生活環境が変わる中学1年生には特に丁寧な指導が必要で、担任として「これくらいはできるだろう」という先入観をなくし、どう頑張ればいいのか？どう行動すれば認められるのか？といったことを学級びらきでしっかり伝えることが重要です。中学入学を機に新しい自分を創り上げたい！そう願っている子どもたちは少なくありません。中学入学の機会をチャンスに変えてやるのが大切です。

特に、人間関係が固定化し、互いの評価がかたまっているような場合に有効です。子どもの世界では単に「力が強い」「発言力がある」といったような人の価値とは直接関係のないようなことで一目を置かれることもあります。その関係性を壊し、人として、集団の一員として本当に価値のある行動ができる人が評価されるという雰囲気をつくるのが大切です。

(4) 中1ギャップへの対応

中1ギャップの解消には「学ぶ意欲」の低下を防ぐということも大切です。子どもたちの中にはすでに学習に対する「あきらめ」をもって入学してくる生徒も少なくありません。そのような子どもたちにとって、3年後の受験に対する不安は大きいものです。部活動に燃え、自己実現を図られる子どもばかりではありません。また、受験のシステムを知らない子どもがほとんどです。中でも「自分はテストの点数が悪いので頑張ってもどうせ無理」と感じている子どもが多いのではないのでしょうか？そこで、中1のこの時期に観点別評価の仕組みを伝えることはモチベーション持続のために有効な方法となります。具体的には「知識・理解」のみで評価されるのではなく、他の観点で頑張れることが沢山あることです。例えば、「忘れものをしない」「宿題をしっかりとやる」「提出物は期限まで出す」「一生懸命授業に参加する」「手を挙げて発表する」…etc.このような姿もしっかり評価に反映されるということを予め伝えることで「あきらめ」を軽減することにつながります。また、学級での頑張り、生徒会での頑張り、部活動の頑張りも全て自分の可能性を広げることにつながるということも伝えたいものです。

小学校との生活環境の変化にとまどう生徒がいることを前提にしなければなりません。特に配慮が必要な生徒については、本人の思い、小学校での支援、保護者の思いを理解し、情報を共有し、全校で支援にあたる必要があります。

2 学級づくりをはじめ

(1) 学級づくりの第一歩は目標づくりから・・・

学級目標は、学級の子どもたちが「どんな学級を目指すのか」という「子どもたちと担任が共に”1年間かけて創りあげる”集団像としての目標」です。その集団像としての学級目標達成に向けて日々様々な活動に取り組む中で「この学級で自分は、どんなことに役立つのか、どんなことを頑張るのか」という一人一人の目標も生まれてきます。

目指す集団像を明らかにすることで一人一人の活動に意味付けがなされ、責任をもって活動に取り組むことが自然な形で生まれ「自分の居場所づくり」につながり、「自己有用感」を感じる集団がつけられます。

“連帯＝きずな”の象徴として、学級目標はあります。また、以下の3点の意味もあります。

- ① 全員の願いを焦点化した表札のようなもので、そこには他のクラスとは異なる学級独自の主張があります。
- ② 願いを共有し合う仲間のきずなを束ねる拠り所になります。
- ③ 自らの居場所の在り方を指し示してくれる存在証明になります。

年度当初に、理想とする学級像について十分話し合い、共通理解した上で、自分たちの学級をどんな学級にしたいかを確認し、合意のもとに学級目標を設定することを大切にしたいものです。



そのためには・・・

- ① 児童生徒の学級への期待や願いを集める
- ② 集団像としての学級目標を決定する
- ③ 学級目標達成のための活動をつくる
- ④ PDCAサイクルで活動を振り返り生活の向上を常に図り、自分たちの変化(成長)を実感する(図2)
- ⑤ 学級の仲間の頑張りを認め合う機会を設ける・・・etc.

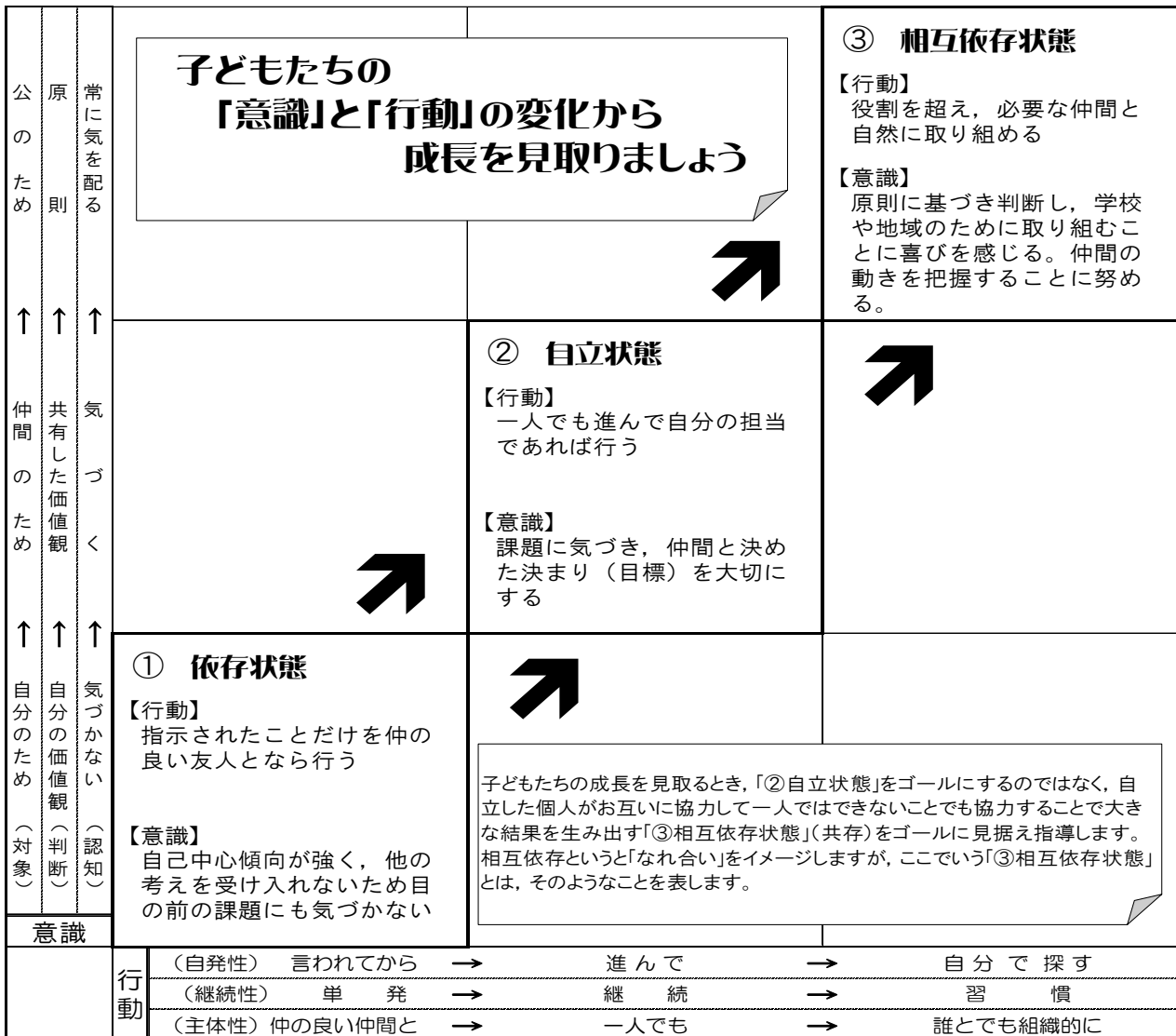
このように1年間の取組を通して「自分たちのことは、自分たちでやるのが当たり前」「自分の成長は学級の成長につながる」「学級の仲間は、共に目標達成を目指す大切な同志」「～のために頑張ることの大切さ」等に気付かせていきたいものです。(図1 資料参照)

(2) 個人目標をつくる・・・

学級目標が決まり、学級組織もできたら「個人目標」づくりを行います。よく見かける個人目標は、学習面・生活面、中学校であれば部活動に関しての目標を書かせることが多いようです。内容に関しても個人に関わることであることが多いと感じます。また、「勉強を頑張る」「～系の仕事を一生懸命頑張る」という目標では進歩が分からず達成度も分かりません。自己評価はできるかもしれませんが、しかし、互いの努力を認め合うチャンスがつかれません。せっかく、学級目標を全員で目指す共通の目標としたのですから、もう一つ新しい視点を設けることでその後の指導にも生かせることがたくさん出てきます。ポイントは、「行動目標」とすることです。

みんなで決めた目標実現のために自分は何をするのか、といった目標にすることで学級内の自分の居場所づくりにつながります。自分の決めた「仲間の取組に対して～する」といった目標は、学級の仲間に対する「宣言」と同じ意味をもちます。「宣言」することで、自分の言動に対する責任を果たさせる指導に生かせます。子ども自身が何を考え、何を決意し、何を行うのかを明らかにすることで「互いを見る目」と、良い取組であれば仲間からの「評価」を得ることができます。担任はその行動をしっかり見届け、学級の財産として生かす事ができます。位置付けていけば良いのです。少し視点を変えることで効果は大きく変わります。

(3) 子どもの成長は“意識”と“行動”で



※ 上の図は、子どもの「意識」と「行動」の変化から成長をイメージしたものです。 (図1)

(4) 振り返りから改善，そして新たな活動へ

学級経営にもP D C Aサイクルを取り入れると，学級全体や各班，個人での取組を振り返ることができ，生徒も自分たちの現状を理解することができます。図2にモデル図を示しました。

<振り返りの仕方>

振り返りは⑨～⑪，そして⑦への部分になります。このサイクルは，1か月や，学期毎の長期的サイクルと，帰りの会などで行う短期的な1日の振り返りサイクルになります。

[学級で]

学級の取組，成長，問題点を確認し，翌月の重点などを確認，改善策を立て，取り組むようにします。

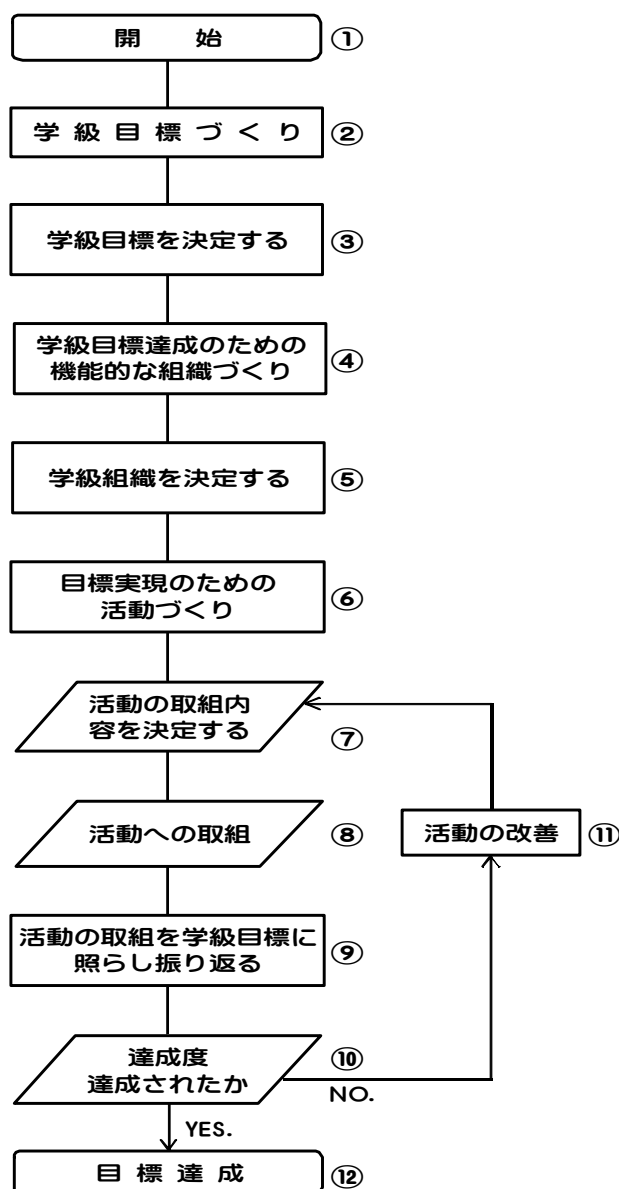
[個人で]

同様に，個人の目標・取組について振り返りを行います。問題点を解決する改善策を具体的に立てさせます。

[各班で]

各班の目標・活動を立て，振り返ることも有効です。振り返り資料を手元に置き，話し合い，まとめたものを掲示してみる。

目標づくりから活動の流れ



(図2)

(5) 行事をただのお祭りにしない・・・

行事にはそれぞれ目的があり，単発で取り組んで成功して終わるのもよいのですが，学級の活動と関連付け，継続した取組で大きな目標を達成していくことができる行事に位置付けてみてはどうでしょうか。自分たちにとってどんな意味があるのかを考えさせ，準備，練習に取り組む行事が一人一人の普段の取組の集大成という意味をもつようになり学級の目標とリンクしてきます。「行事が成功してよかった」だけでなく，この行事への取組を通して「一人一人の温度差が解消ができた」「自分たちにもできることが分かった」「これでまた目標に一步近づけた」などのまとめができる行事になります。

(6) 取組が停滞したら・・・

当初はやる気十分で始めた活動も，毎日の地道な活動であったり，進歩が見えにくい活動であったりするとやがて必ず停滞を招きます。そのようなとき，初心に戻り，再活性化に必要な考え方，取り組み方を考えさせることが大切です。

1～7の項目で学級内や生徒の様子をみて，次の手立てを考えて行きましょう。

「学級づくりのポイント」

1 認め合い、支え合い、関わり合いを大切に

一人一人の意識の温度差は必ずあります。それをどのように乗り越えていくかを考えさせます。諦めず、周りと同じようにできない人を排除するのではなく仲間の一員として大切にし、それでも励まし合いながら一緒に目標に向かって進んでいくように導きます。

2 みんなで決めた目標の実現を優先順位の第一とすること

組織は

⇒やりたい人が担当ではなく適材適所で分担します。

※やりたいとできるは違います。

⇒その人の人間性ではなく、行動に注目し評価します。

※どんなに良い考えがあっても行動に移さないと何もしないことと同じです。



3 目標達成の条件を具体的にあげ全員で確認すること

各班の取組、自分はどの部分を担当しているのかを把握させながら活動させることが大切です。

4 全ての活動(取組)は目標達成のためにあること

自分の取組は目標達成のために役に立つのか？この活動をすることでどのような自分になれるのか？を常に問いかけながら活動できるよう支援していくことです。

5 日々の活動を見直すこと

理想は、全員参加が原則です。各班に毎日仕事があり、当番制で取り組むことです。班員が毎日自分たちに与えられた仕事が滞りなく行われるよう支援するリーダー(班長)も育てていきたいものです。

6 絆は作るモノではないこと

一生懸命仲間と認め合い、支え合い、関わり合いながら困難を乗り越えたときに初めて「絆ができた」となります。

7 掲示物の役割について

今の学級の状態、活動の進行状況、学級目標の達成状況が一目で分かる教室内の掲示物を工夫していきたい。一人一人が主役であることを確かめることができるツールになります。

3 まとめ・・・

生徒指導上の問題のみならず、学力の問題に関しても、最近様々なところで耳にするようになってきたのが「集団としての力が弱まってきている」ということです。

子どもたちを「認め」、自己肯定感を高めることの重要性がクローズアップされています。いかに学びがいのある学習課題や考えさせる発問を用意しても、主体的に学習活動に参加する学級集団が形成されていなければ、学習意欲や学力の向上は望めません。

集団の中で学ぶという学校教育の特質を生かして、「意欲的に学習に取り組む生徒の育成」を図るには、授業の充実を図ることに加え「学びに向かう集団」をつくる取組も必要です。

集団の状況は教育実践の成果を大きく左右します。また、子ども一人一人の成長は、どのような集団に属しているかに大きく影響を受けます。そこで、子ども一人一人の資質の向上のためには個への指導や支援とともに、集団を意図的・計画的に育てることが必要になります。

学びに向かう集団「帰属意識の高い学級」「規範意識の高い学級」「互いに高め合える学級」

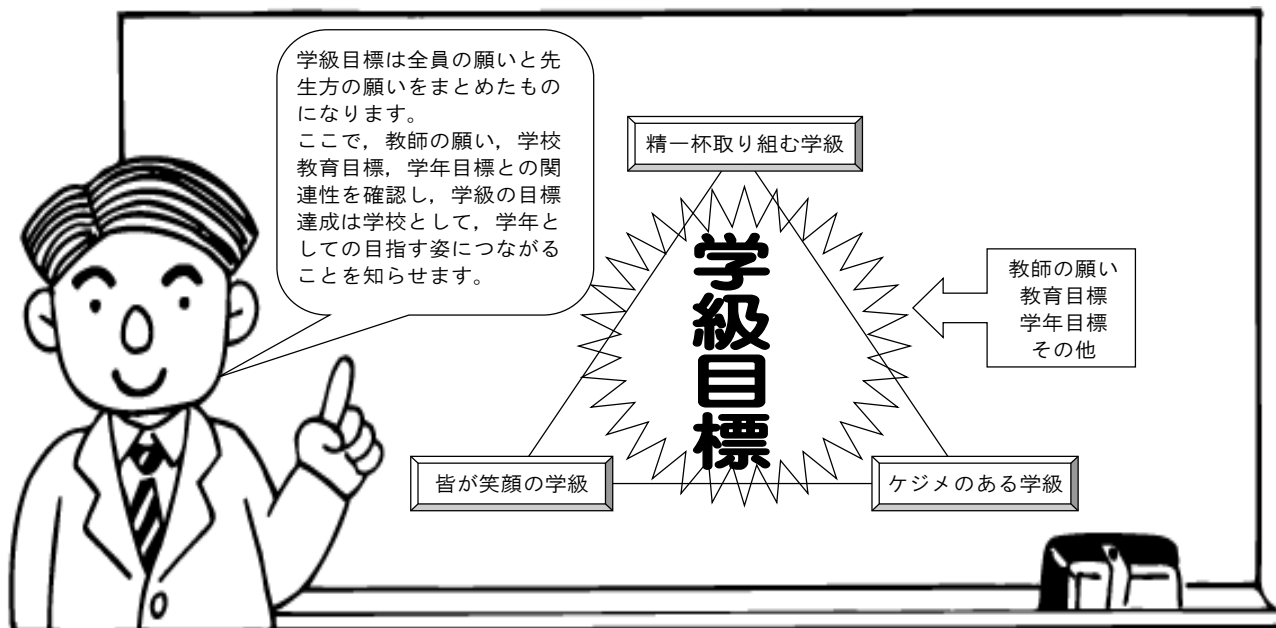
の3つの視点で学級を学習集団へと育て上げることで豊かなコミュニケーションが成立することとなり、授業における意見交換やグループ学習が深まっていきます。

効果的に学力向上を目指すには、教科からのアプローチと「学びに向かう集団づくり」の両側面から取り組み、相互の関連を図ることでより成果が得られるものと考えます。

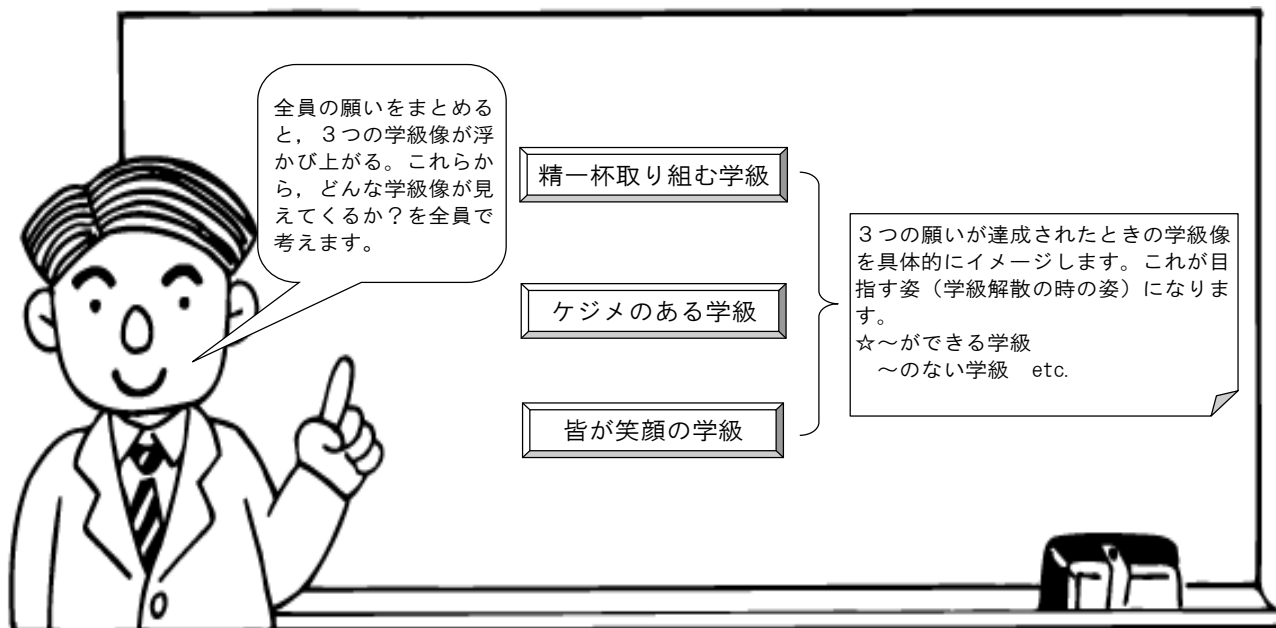
また、「いじめ」は「いつでもどこでも誰にでも起こる可能性がある」との認識を確認し、併せて、いじめの原因を「心」の問題だけにしないという認識も必要と考えます。集団の状況によっては「心」の在り方如何に関わらず「いじめの加害者」または「傍観者」になる可能性があります。大人も子どもも周りの仲間の行動を見ながら自分の行動を調整しています。人間の行動は集団の在り方によって大きく変化する可能性があります。

このようなことから「学力向上」「いじめ防止」さらには「不登校の未然防止」という観点からもう一度、集団づくりを考えてみる価値があるのではないのでしょうか。

STEP 3 願いを整理する②



STEP 4 願いを整理する③



みんなで決めた学級目標をただの掲示物にしないために確認しておきましょう。

① 反対意見は、その場で言うこと

沈黙は同意と同じ。あとから「自分は知らない(関係ない)」などということがないようにすること。

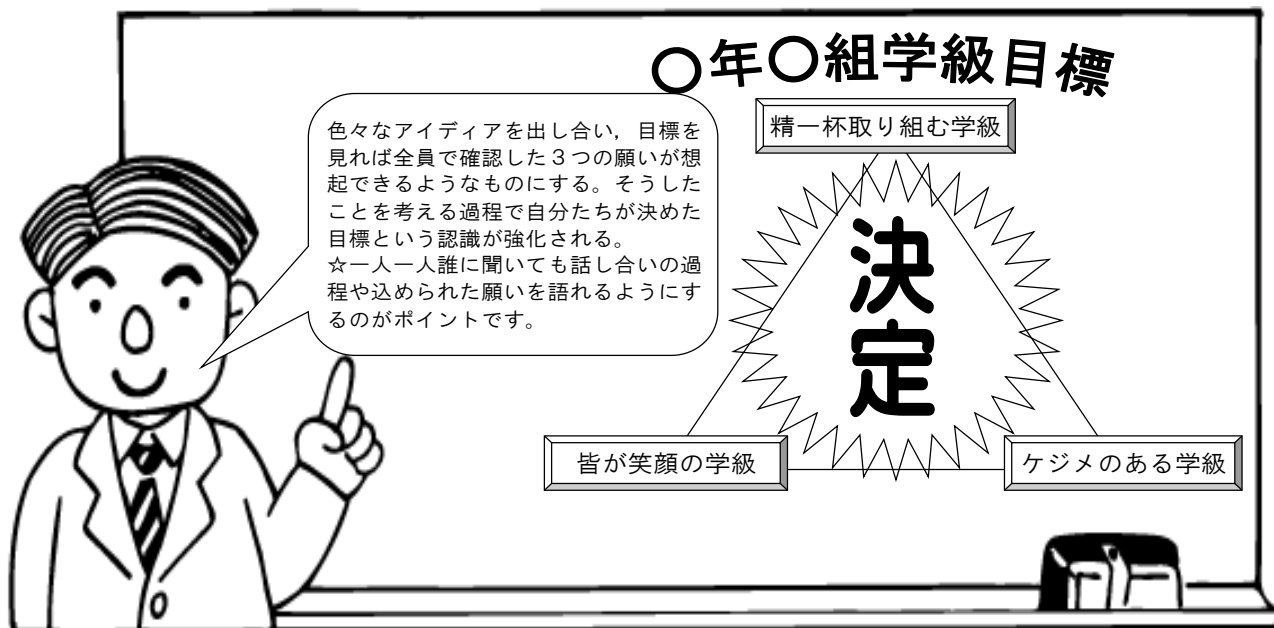
② 一生懸命が一番！

失敗してもいい。一生懸命さをからかったり、バカにすることは絶対許されない。

③ 行動で示す

みんなで決めた学級目標実現のため自分は何ができるのか？仲間のために何ができるのか？「～のため」の行動を個人目標としていく。

STEP 5 学級目標決定



目標づくりのポイントはしっかり学級全員で合意形成が成されているかが重要です。具体的には目標が決まったとき、以下の3点ができている学級は、しっかりとした話し合いを基に目標づくりができたといえます。

- ①学級で確認した学級課題を一人一人が言えるか？
- ②学級目標に込められたみんなの願いが一人一人言えるか？
- ③学級目標を達成したとき、どんな自分たちになれるか一人一人言えるか？